



駅の近くにある「傳和泉式部の墓」

きすき
木次線ストロール⑦
かめだけ
亀嵩駅

「和泉式部の墓？」

『砂の器』の舞台の地

今日は曇り空、風が強く冷たい。3月18日月曜日、朝の8時45分に車で庄原の自宅を出た。田は緑の草に覆われ、シロツメグザやレンゲが咲いている。

10時過ぎに出雲横田駅に到着。始発の列車が7便増えて、木次や宍道方面が1日10便になる。乗り

場が違うので注意が必要。始発便は駅舎のある2番ホーム、備後落合駅始発の3便は線路を渡った1番ホームになる。

駅前の駐車場に車を停めて、10時34分発の木次行きに乗車。今回の列車は、木次線のブランドカラーのきすき色（山吹色）と棚田

の緑色のツートンカラー。車体の色が違う列車が6種類あるので、どんな列車がホームに入ってくるのか楽しみだ。

わたし以外にも地元の方が一人乗車。車内には旅行客らしい先客が3人。時間調節が、8分ぐらい停車していた。八川―出雲横田間は平地を走るイメージだが、亀嵩までの車窓は川沿いの溪谷の景観が多くなる。そして、長いトンネルを通過した先に亀嵩駅はある。乗車時間は12分ほど。料金は210円で、今までの経験で、一駅区

間が200円を超えると距離が長くなり、帰りの歩きが大変になる。出雲神話にちなんだ駅の愛称は「少彦名命（すくなひこなのみこと）」。駅の東北にある湯野神社には、大国主命（おおくにぬしのみこと）や少彦名命が祀られている。この二柱の神様は協力して国造りを行い、人々のために病氣治療の法、動物の災いを除く呪（まじな）いの法などを定めたと伝承されている。「スクナ」という言葉には「小さな神」という説がある。

駅舎は小さくて、その半分が「扇屋」という手打ち蕎麦の店舗になっているが、残念ながら臨時休業を告示する貼り紙が扉に掲示されていた。駅前には観光用の警察官の顔ハメ看板。亀嵩は、松本清張の長編推理小説「砂の器」の舞台になった場所で、野村芳太郎監督で映画化され、昭和49（1974）年に公開された。緒方拳が扮する地元の警察官が、神社の拝殿の下に潜んでいるハンセン病の父親と息子の巡礼者を見つけるシーンが、前出の湯野神社で撮影された。

駅前の国道432号線を少し左に行くと「誤、不思議」ここにあり和泉式部の墓」という看板が立っている。案内板の指示に従って進むと、木次線の線路を超えた山裾に、「傳和泉式部墓」（写真）がある。解説板によると、右の笠

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10

誌面デザイン: ROUTE183
協賛：九日市愛好会